幸せ降る出世傘 91歳の技

年　　組　名前

長野市の善光寺門前で140年以上続く老舗「三河屋洋傘専門店」3代目の北沢良洋さんは、県内で数少なくなった現役の傘職人です。良洋さんの傘に対する思いを読み取りましょう。

①次の漢字の読みがなを書きましょう。

（　　）　（　　）

老舗　　普及

（　　）　（　　）

義父　　縫製

②良洋さんは自分が作った傘を、どのように思っていますか。また、「〜のように」という比喩表現を何といいますか。

傘―　　比喩表現―

③店は、石油業を営んでいた義理の祖父、万吉さんが1877年に創業しました。その頃はどういう時代で、創業はどんなことがきっかけでしたか。

時代背景―

きっかけ―

④「手間と技術を込めて作る」とあります。その様子について、具体的に何と書いてありますか。抜き出しましょう。

⑤良洋さんの傘は、買った客が出世する「出世傘」として評判です。指名する客は、何と話していますか。

⑥日傘を買いに訪れた酒井恵子さんは、良洋さんの傘について何と話していますか。

幸せ降る出世傘 91歳の技

こもれび

2千本ほどの傘が並ぶ店内に、ドイツ製のミシンが回る音が静かに響く。操るのは長野市の善光寺門前で140年以上続く老舗「三河屋洋傘専門店」（西之門町）3代目の北沢良洋（よしひろ）さん(91)。職人仲間は一人、また一人と引退し、県内で数少なくなった現役の傘職人だ。

「客に幸せが降るように」。一針一針、丹精した「3世代使える傘」は大切に育てた娘のよう。客の手に渡る時は「かわいがってくれよ」とお嫁に出す気持ちになる。

北信地方で石油業を営んでいた義理の祖父、万吉さんが1877（明治10）年に創業。油に代わり電気を使った照明器具が普及し始めた頃、横浜で洋傘を目にしたことがきっかけだったという。

下高井郡木島平村で生まれた良洋さんは17歳で2代目の義父に弟子入り。義父は厳しく、「（技術は）見て学べ」と教わった。信州大教育学部（長野市）に進学し、同級生がマージャンやパチンコに明け暮れる中、まっすぐ家に帰って技を盗んだ。

入念に生地を選び、裁断は立ち仕事。裁断や縫製は1ミリのずれも許されない―。多くのビニール傘が使い捨てされる今、手間と技術を込めて作る洋傘の専門店はわずかとなった。良洋さんの傘の売れ筋は5千～2万円と安くはないが、買った客が出世する「出世傘」として評判を呼び、「良洋さんの手で作る傘がほしい」「良洋さんに直してもらいたい」と指名する客は少なくない。

今月上旬、日傘を買いに訪れた近くの酒井恵子さん(65)は、退職祝いに良洋さんの傘をもらったことがあり、今回が2本目。「手作りのぬくもりも感じる。大切に使いたい」。店はホームページもなく電話での受け付けのみだが、全国から注文や修理依頼が絶えない。

今年1月、ミシン縫製を担い二人三脚で傘作りをしてきた妻の林子（しげこ）さんが他界した。「目がしょぼしょぼして針の先に糸が通すことが難しい」。それでも「100歳まで現役でいたい」と踏ん張る。

梅雨はもうすぐ。11日は日本洋傘振興協議会が定めた「傘の日」だ。

（樋口 佳純）

ドイツ製の手回しミシンで縫製する北沢さん＝7日、長野市西之門町

（2024年6月12日・第二社会面〈こもれび〉）

幸せ降る出世傘 91歳の技

解答例

年　　組　名前

長野市の善光寺門前で140年以上続く老舗「三河屋洋傘専門店」3代目の北沢良洋さんは、県内で数少なくなった現役の傘職人です。良洋さんの傘に対する思いを読み取りましょう。

①次の漢字の読みがなを書きましょう。

老舗（しにせ）　普及（ふきゅう）

義父（ぎふ）　縫製（ほうせい）

②良洋さんは自分が作った傘を、どのように思っていますか。また、「～のように」という比喩表現を何といいますか。

傘―大切に育てた娘　比喩表現―直喩

③店は、石油業を営んでいた義理の祖父、万吉さんが1877年に創業しました。その頃はどういう時代で、創業はどんなことがきっかけでしたか。

時代背景―油に代わり電気を使った照明器具が普及し始めた頃

きっかけ―横浜で洋傘を目にしたこと

④「手間と技術を込めて作る」とあります。その様子について、具体的に何と書いてありますか。抜き出しましょう。

【解答】入念に生地を選び、裁断は立ち仕事。裁断や縫製は1ミリのずれも許されない―。

⑤良洋さんの傘は、買った客が出世する「出世傘」として評判です。指名する客は、何と話していますか。

【解答】良洋さんの手で作る傘がほしい

良洋さんに直してもらいたい

⑥日傘を買いに訪れた酒井恵子さんは、良洋さんの傘について何と話していますか。

【解答】手作りのぬくもりも感じる。大切に使いたい